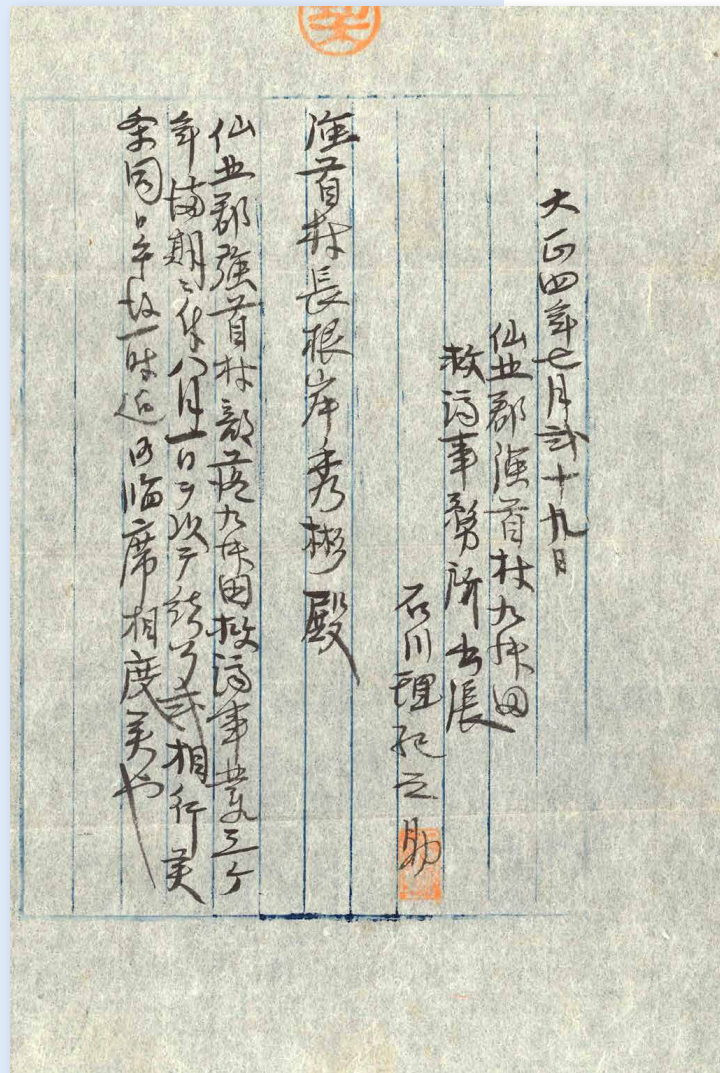


# MUSEUM NEWS

## 秋田県立博物館ニュース



### 新着収蔵資料紹介

石川理紀之助 書状

大正4年7月29日強首村長根岸秀彬宛

仙北郡強首村九升田救済事業終了式開催通知

秋田県種苗交換会を立ち上げ、農聖とも呼ばれた石川理紀之助は、生涯を農村の更生、振興のために捧げました。この書状は秋田県知事から懇望されて明治45年から携わった救済事業が一区切りついたことを示しています。

### CONTENTS

- 01 表示・目次
- 02 展示報告「稲穂の詩～秋田と米づくり～」
- 03 展示紹介「秋田の宝 県指定文化財展」
- 04 学芸ノート コーナー展「ひっつき虫あれ?コレ!!」  
& 「ひっつき虫コレクション」
- 05 展示報告「石井露月 子規に見出された医師俳人」  
活動報告 博物館実習
- 06 学芸ノート「本丸御殿の半分しか描かれていない絵図のお話」
- 07 学芸ノート「今も出会える、いにしへのクジラたち」
- 08 令和7年度 展示スケジュール

令和6年9月28日(土)～12月1日(日)

# (企画展) 稲穂の詩 ～秋田と米づくり～

令和6年9月28日(土)から12月1日(日)までの期間、企画展「稲穂の詩～秋田と米づくり～」を開催しました。この企画展では秋田県の米づくりに関する歴史や文化、稲作技術の進歩を幅広い視点から紹介しました。

1章「秋田の米づくりの歩み」では、秋田県の米づくりの歴史を紹介しました。当館所蔵の歴史資料から、「米どころ」と称される以前、秋田県の米づくりは大変厳しい状況であったこと、秋田の米が評判を落とし「腐れ米」とまで呼ばれていた時代があることに来館者からは驚きの声が多く寄せられました。

2章「米づくりに奮闘した人々」では、秋田県の米づくりの発展に寄与した高橋正作、石川理紀之助、斎藤宇一郎、仁部富之助の4名の先覚者について取り上げその功績を紹介しました。特に、高橋正作、石川理紀之助が生涯を通じてさまざまな村の農業経営指導に当たり、村々を救済した姿は多くの方々に深く感銘を与えたようです。「二人の強い絆とその生涯に感動した」という声が多く聞かれました。

3章「昔の農具と人々の暮らし」では、版画家勝平得之の作品やアマチュア写真家井上一郎が撮影した農村の暮らしを記録した白黒写真、そして昔の農具を展示しました。来館者の多くが「なつかしい」「昔の農作業を思い出す」と、ご家族で昔の暮らしを振り返る姿もみられました。

4章「イネをめぐる環境と技術」では、田んぼを利用している動物、田んぼや池沼に生育している植物の標本を展示しました。技術の進歩の裏側で環境の改変によりかつて普通に見られていた生き物が現在は絶滅の危機に瀕していることを、絶滅危惧種のさまざまな標本を通じて紹介しました。

5章「米づくりのこれから」では、米粉や飲料、玩具から食器まで、「米」を原料として作られているさまざまな製品を紹介しました。さらに、高齢化や省力化に向けたデジタル技術の役割についても解説し、アグリロボ田植え機をはじめとするスマート農機を紹介しました。

この企画展を通して、秋田県の米づくりの歴史や米の魅力を少しでもお伝えできたのであれば幸いです。ご来場いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

(生物部門 藤中由美)





令和7年2月15日(土)～4月6日(日)

# 企画展 秋田の宝 『県指定文化財展』

県指定文化財は、秋田の人びとが守り伝えてきた絵画、工芸品、考古遺物、歴史資料等の中から選ばれた品々です。それらは秋田の文化史を物語るうえで欠かせない、地域の宝というべきものです。とすれば国が指定する国宝・重要文化財のほうが注目されがちですが、県指定文化財は地域色が濃く、地元の文化がよく分かり、技法や表現がユニークな品物もあり、県指定ならではの価値があります。本展では県内各地に伝わる県指定文化財を紹介し、地域の価値を見直す機会としました。

また、展示した柏子所貝塚出土品に関連し、さらに同貝塚の県史跡指定70周年を記念して、貝製品研究の第一線でご活躍の忍澤成視氏を講師にお招きし、「貝輪の考古学」と題する講演会と貝輪作り体験会を3月16日に実施しました。  
(歴史部門 新堀道生)



秋田家資料  
一ノ谷兜  
(当館蔵)



短刀 銘天野  
藤原高真作  
(当館蔵)



鐺 あやめ図透彫  
正阿弥二代作  
(当館蔵)



男鹿図屏風 右隻  
(当館蔵)

## 「風俗絵巻」の人物群像

全長約14メートル、11場面にわたり江戸時代の秋田の風俗・行事を描いた「秋田風俗絵巻」。本展ではその全場面を一挙公開。生き生きとした姿で描かれた人物からは、声や息づかいまで伝わってきそうです。



ジビエの出店



飴はお孫さんに？



ちよい悪ふう奴振り



正月の風物詩、万歳



汗をふきふき歩く足軽



そのゴザなんぼ？



ヤケド必至の  
火振りかまくら



全力で「しょうぶ打ち」  
に興ずる武家子弟



# コーナー展「ひっつき虫あれ?コレ!」&「ひっつき虫コレクション」 —共通テーマで展示室をつなぐ企画—

衣服や動物の毛などにくっついて運ばれる植物のタネ<sup>注</sup>を、ひっつき虫（くっつき虫）と呼んでいます。野原や山道を歩いた際に、気づいたらズボンについていて、取り除くのに苦労したことはありませんか。植物は何のために、どんなしくみで動物にタネをくっつけるのでしょうか。

昨年10月から、1階自然展示室と2階わくわくたんけん室とで連携し、ひっつき虫を共通テーマとしたコーナー展を行っています。それぞれの展示室の特徴を生かして、自然展示室では知覚型、わくわくたんけん室では体験型を中心とした、多様な形態で展示を構成しました。両コーナー展を通して、ひっつき虫はもちろん、自然環境への関心を高める機会にもしたいと考えています。

自然展示室では、コーナー展「ひっつき虫あれ?コレ!」を開催しています。ひっつき虫がくっつく仕組みを4通りに分け、それぞれの代表的な植物の押し葉標本や写真を展示しています(写真①)。なかでも、虫眼鏡を備え付けたひっつき虫観察ボックス(写真②)は子どもたちに大人気で、ひっつき虫がくっつくしくみに興味を持つきっかけになっています。また、ひっつき虫と私たちの暮らしとの関わりをパネルで紹介していますが、バイオミメティクス(生物模倣技術)のほか、外来種、絶滅危惧種を取り上げて生物多様性にも切り込んだ、やや専門的な内容としています。

わくわくたんけん室は、「みて、ふれて、しらべて、やってみる」をキーワードに、様々なアイテムを利用した体験活動ができる展示室です。こちらではミニコーナー展「ひっつき虫コレクション」を開催しています。自然展示室の展示内容をさらに深掘りして学ぶことができるようにするとともに、実物資料を用いた体験や使い方のサポートが必要な器具を用いた体験もできるようにしました。例えば、手持ちの虫眼鏡を使ったひっつき虫観察コーナー(写真③手前左側)に加えて、双眼実体顕微鏡を用いて本格的な観察ができるコーナーを設けています。また、様々な種類の布にひっつき虫をくっつけてみるコーナー(写真③手前右側)があり、お子様からご年配の方まで楽しみながら体験していただいています。なかには、想像以上のくっつく威力に驚かれる方や、くっつきやすさの違いをもとに、厄介なひっつき虫対策になる服装のヒントを得ている方もいらっしゃいました。

今後もそれぞれの展示室の特徴を生かしながら、広がりや深まりがあり、いろいろな角度から学ぶことのできる展示を企画していきたいと思えます。

「ひっつき虫あれ?コレ!」「ひっつき虫コレクション」は令和7年9月30日まで開催しています。ひっつき虫の秘密を探りに、ぜひお立ち寄りください。

注 大部分の植物の種子は保護したり散布したりするための付属物をもっていますが、ここではまとめて「タネ」と表現します。

(生物部門 三浦益子)



①自然展示室 「ひっつき虫あれ?コレ!」展示風景



②自然展示室 ひっつき虫観察ボックス



③わくわくたんけん室 「ひっつき虫コレクション」展示風景

令和6年9月21日(土)～11月24日(日)

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

石井露月 子規に見出された医師俳人

今年度の秋田の先覚記念室・企画コーナー展では、秋田市出身の俳人で医師の石井露月を取り上げました。露月は「近代俳句の父」と称された正岡子規の高弟であり、秋田をはじめとする地方俳壇の活性化を図った人物です。その傍らで、地元女米木で医院を開業し、医師として故郷を支え、その発展に貢献したことも知られています。露月が創刊に携わり、初代主幹も務めた日本派の俳誌『俳星』は、平成27年6月号をもって休刊するまで、通巻1140号が発行されました。

本展では、露月の生涯と功績について、資料展示と解説パネルで紹介しました。露月の著書や直筆資料のほか、診療所で使用していた診療簿、露月夫妻の銀婚式を祝った記念の品々など、俳句はもちろんのこと、家族と故郷のことを常に想っていた露月の素顔が垣間見えるような資料40点を展示しました。

また、展示に関連した付帯事業として、10月27日(日)に、あきた文学資料館顧問で、女米木地区の住民でつくる顕彰団体「露月会」会長の京極雅幸氏を講師にお招きし、「俳人・医師 石井露月」と題してご講演いただきました。約40名の参加者がみえられ、露月の人間味あふれる人物像について興味深く耳を傾けられました。



石井露月 (1873～1928)



展示の様子

**展示構成**

- 1 生い立ち
- 2 東京へ
- 3 医師露月誕生
- 4 子規逝く
- 5 故郷を想う
- 6 星になる



露月夫妻の銀婚式を祝った記念の品々(個人蔵)など



講演会の様子

(秋田の先覚記念室担当 千田育栄)

博物館実習

学芸員の仕事は多岐にわたり、博物館や美術館で作品や資料の保存や研究を行ったり、展示を企画して資料調査や借用交渉を行ったりします。また学校や市民講座などで講師を務める教育的な仕事もあります。公立施設の学芸員は、地域社会の文化財保護や自然保護関係の調査に関わったり、観光振興に携わることもあります。

学芸員になるには、大学で資格取得に必要な単位を修得するのが一般的です。大学では博物館にまつわる専門知識を学ぶほか、実習が必修となっており、実際の博物館業務を体験することで、学芸員の仕事内容を深く理解することができます。

令和6年度は6名の学生が当館の博物館実習に参加し、講義と体験実習の指導を行いました。講義では、当館の概要説明や各部門の担当者から業務の説明を受け、体験実習では、収蔵庫の見学やSNSを活用しての広報、担当者の指導のもと資料取扱や調査書の作成、野外調査の訓練などを行いました。

博物館実習は、学生が将来の職業への理解を深める貴重な機会であるとともに、博物館にとっても基礎や理念を再確認したり、第三者の視点から博物館活動を見直すよい機会でもあると言えます。今後も、学生にとっても博物館にとっても、効果的なものとなるようにしたいと思います。

(普及・広報チーム 鈴木秀一)





# 本丸御殿の半分しか描かれていない絵図のお話

今回紹介する館蔵資料は、久保田城本丸御殿の平面図（「出羽国秋田城内絵図」、以下「城内絵図」と略記）です。文政4年（1821）8月に作成された絵図で、御殿内部の間取りが記されています。

絵図の一番下（東）に小さく張り出した区画は玄関であり、本丸表門（一の門）から入った正面に位置しています。絵図では、畳敷の部屋は黄土色で着色されており、廊下など板敷の空間は茶色に塗られています。また、一部の部屋に限定されているものの、「番所」「伺公之間」「四季之間」など、部屋の名称も書き込まれています。さらに注目すべきは、各部屋や「縁類（部屋外周の廊下状の空間）」で使用している畳の枚数が細かく記されている点です。畳の枚数を全て集計したところ、全部で1,159畳半となりました。ちなみに、最も広い部屋は対面所「三之間」で、63畳半ありました。

ご存じの通り、久保田城跡（秋田市千秋公園）の御物頭御番所を除けば、秋田県内の城跡に藩政時代の建物は一切残っていません。その上、城内の建物の構造や間取りを記録した絵図類でさえ、現存する点数はかなり限られています。その意味でも、この「城内絵図」は大変貴重な資料です。

さて、久保田城本丸と言えば、明治時代に刊行された『秋田沿革史大成』の付録図である「秋田御城内御座敷廻絵図」に、御殿を中心とする本丸全体の構造と間取りが記されています。当館の「城内絵図」も、『沿革史大成』付録図に描かれた本丸御殿の平面図と一致する点が多いのですが、明らかに大きく異なる点もあります。それは、『沿革史大成』付録図には見られる本丸御殿北側の区画が、「城内絵図」には全く描かれていないことです。つまり、「城内絵図」は久保田城本丸御殿

の南側半分だけの絵図であり、実際には絵図右（北）にさらに別の部屋や施設が続いていたということになるのです。

「城内絵図」に描かれた御殿の南側は、玄関から比較的近い区域であり、登城した藩士が待機する場所や政務を執る部屋、そして藩主が藩士と対面する部屋などが設けられています。これらは、表向などと呼ばれる城内の公的な空間に属します。それに対し、藩主やその家族、奥女中などが日常生活を送る奥向と呼ばれる空間も城内には存在し、久保田城では本丸御殿の北側に奥向が設けられていました。従って、「城内絵図」に描かれていない部分とは、主に後者の奥向に該当する区域となります。

そもそも、この絵図はいかなる目的で作られたのでしょうか。絵図裏面に貼付されている別紙には、「御国目付 御蔵分」という文言が記されています。文政4年には幕府から秋田藩へ国目付が派遣されていますので、この資料は国目付へ提出する目的で作成された絵図の控（御蔵分）であると考えられます。なお、秋田県公文書館所蔵の「御国御目付御用日記」には、同年7月に国目付から命じられて急きょ「御城内絵図」を作成した様子が記されており、上記の推測が裏付けられます。その記事によると、城下絵図や城絵図とは異なる城内絵図には一体何を描けば良いのか、秋田藩は当初判断しかねたようです。そこで、前例のある仙台藩から情報を入手して、国目付が視察した本丸御殿の「御座敷表向ばかり（＝奥向を除外した区域）」を描いた絵図を仕立てました。受理した国目付も「至極結構」と満足していたため、これで問題なかったのでしょうか。

（歴史部門 黒川陽介）

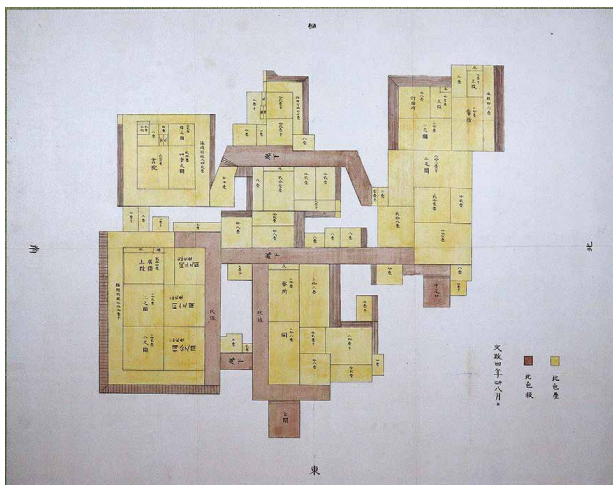


図1 「出羽国秋田城内絵図」文政4年（1821）

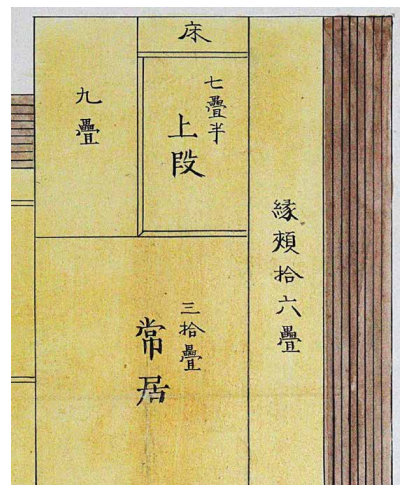


図2 「城内絵図」の部分図  
（絵図右上(北西)の区画を拡大）

# 今も出会える、いにしえのクジラたち

博物館が行う活動の一つに教育普及活動があります。生涯にわたって学び続けたいという県民の思いを後押しするもので、皆さんを当館にお迎えして学びの機会を提供する活動の他、学芸職員が館外に出向いて行う活動があります。学校からの依頼で行う館外活動を出前授業と呼んでいます。ここでは令和6年度に地質部門が担当した出前授業の一つを取り上げ、皆さんに紹介します。

「学校の近くで見つかった化石をきっかけに、自分のふるさについて深く学ぶ授業を3年生を対象に行いたいのですが、お手伝いをしていただけませんか。」秋田市内の中学校で理科の授業を受け持つH先生からお声がけいただきました。H先生は、それがセミクジラの肋骨の化石であることやその化石が当館所蔵であること、その化石はご自身の勤務校の傍を流れる川の河床から40年以上前に見つかったものであることなどよくご存じでした。そこがかつては海の底であったことを、山間にくらす子どもたちに確かな実感をもって理解させたかったのでしょう。当館に化石の館外貸出を申請し、校舎内に展示して見せたところ、子どもたちが興味を示し化石の発見現場を実際に見に行きたいという話になったとのことでした。

出前授業の企画中、学校から数km離れた発見現場への行き来の際にある課題に気付きました。訪問を予定する場所が、令和5年7月に秋田県で発生した大雨・洪水被害の復旧工事の最中であり、1年以上経った今も復旧工事が続いて関係者以外立ち入り禁止となっていることでした。そこで、秋田県や秋田市の関係各所に出向き、授業のねらいや事情を伝え、フィールドワークの実施についてお力をお貸しただけでないものか相談しました。復旧工事に携わる方々が最も心配することのひとつもまた、子どもたちの安全でした。せっかくの学びの機会が思わぬけがにつながってはいけません。安全を確保しながら学習を進める方法を考えていたところ、秋田県の工事担当者が「この度の災害復旧について学ぶこともまた、自然のもつ力の大きさやそれと向き合って生きていくことについて考える学習につながるし、それは正に『地域の自然を見つめ、深く学ぶ』というH先生の考えにも一致するのではないか。」と話されました。すなわち、今回のフィールドワークの中に復旧工事現場見学を組み込むことで、工事現場全体として現場内の安全を確保し、子どもたちを迎え入れることができるとの提案でした。わたしたちはその提案をありがたくお受けし、フィールドワークが実現することになりました。

当日のフィールドワークには3名の博物館関係者（学芸職員およびボランティア）で伺いました。出前授業で主に考えてほしいことは次の四つと考え、出前授業に臨みました。

- 現在、私たちがくらしている大地はどのようにしてできたのだろうか。
- 大地ができる過程の中で生まれた「化石」とはどんなものだろうか。
- 災害を引き起こす程の自然の力とはどんなものだろうか。
- 自然の力と向き合いながらどう生活していけばよいだろうか。

災害復旧については秋田県職員や工事担当者の方がていねいに教えてくださいました。設定時間に対して少し欲張りかなとも思える内容でしたが、子どもたちはよく見聞きし、質問し、考えていました。授業を終え、H先生は「来年は改めて、復旧を終えた河原の土手を全校生徒で歩き初めできると思います。」と話されました。

当館1階自然展示室の足下にクジラが元気に『泳いで』います。デワクジラといいます。「デワ」という言葉がこのクジラの発見場所のキーワードです。

さあ、あなたの学びのフィールドに当館を加えてみませんか。皆さんの活用をお待ちしています。

(地質部門 築地 洋)



▲昭和63年8月、東京から来ていた大学生が発見しました。



▲出前授業の様子▼





# 2025年度 展示予定

## 企画展示室

### 企画展

## 昭和のアキタ

— 百年の暮らしをつづる —

2025年は昭和がはじまって、ちょうど100年になる年です。昭和という時代は、戦争や高度経済成長などがあり、人々のくらしが大きく変化した時でもあります。100年前にタイムスリップして、身近に使われていた道具から、秋田のくらしの変化を見つめていきます。



4月26日(土)～6月15日(日)

### 特別展

## ヨシタケシンスケ展 かもしれない



©Shinsuke Yoshitake

子どもから大人まで、大ブームを巻き起こしている絵本作家・ヨシタケシンスケの東北初開催となる大規模展覧会。絵本原画、本展のためにヨシタケさんが考案した立体物や愛蔵のコレクションなど約400点以上を展示し、作家の「頭のなか」をのぞいてみます。

7月12日(土)  
～9月7日(日)

### 企画展

## かく、えがく。

— 菅江真澄遺墨資料展 —



江戸時代後期、各地を旅した紀行家・菅江真澄は旅の記録を200冊以上残し、文章だけでなく図絵も描きました。真澄の記録を分類して、その一つ一つを紐解き、文章と図絵で何を記録したのかを詳しく紹介します。

9月27日(土)～11月16日(日)

### 企画展

## 秋田県博 50年のあゆみ

秋田県立博物館の開館50周年を記念して、これまでの歩みを振り返る企画展を開催します。秋田の歴史と文化を形作った人々の暮らしや、自然との関わりを、貴重な資料や展示品で紹介。未来へと繋がる博物館の姿をぜひご覧ください。

令和8年1月10日(土)～4月5日(日)

## 菅江真澄資料センター企画コーナー展

## 秋田の先覚記念室企画コーナー展

## ふるさとまつり広場

- 子どもの成長を願う～端午の節句～  
4月10日(木)～6月10日(火)
- 夏のまつり～七夕絵どうろう～  
7月3日(木)～9月11日(木)
- 目潟巡る真澄—男鹿半島の三つの目潟—  
7月5日(土)～8月24日(日)
- 秋田の酒と人  
10月8日(水)～12月7日(日)
- 秋の夜長を楽しむ～明かりの道具～  
10月9日(木)～11月11日(火)
- 真澄の歩いた道《ひなの遊び》・《氷魚の村君》  
11月1日(土)～12月21日(日)
- 正月の来訪神～ナマハゲ～  
12月4日(木)～令和8年2月3日(火)
- 春の訪れ～ひな人形・押絵～  
2月26日(木)～4月7日(火)
- 真澄白語り  
3月14日(土)～5月10日(日)